

妖怪の社会心理学的研究

主査教員 桐生正幸

社会学研究科 社会心理学専攻 博士前期課程2年

高橋綾子

本研究の目的は、妖怪に対する日本人の態度（認知、感情、行動）を明らかにし、その社会心理学的な生起メカニズムと社会的役割¹⁾を検討することである。本研究においては、妖怪の定義を「未知なる奇怪な現象または異様な物体であり、人間に何らかの感情や行動を生じさせ、かつ、固有名詞を持つもの」とする。また、妖怪が果たす役割を「社会的役割」とし、「社会や人間に対する妖怪の作用」と定義する。ただし、本研究においては妖怪とその他の不思議現象とは区別して論じることとする。合わせて、本研究では妖怪がどのような心的過程をたどって生じたのかを次のように仮定し、生起メカニズムモデルの仮説とする。ある個人がネガティブな出来事を経験し

- A. その原因帰属とそれに伴う情動を社会的共有し
- B. 他者による承認が得られることでネガティブ感情が抑制され、妖怪らしきものが生起する
- C. さらに集団に伝播する中で、その社会的役割が取捨選択され、社会的秩序が整えられる

上記が繰り返されることで妖怪が生起したと本論では捉えている。これら生起メカニズムモデル仮説と社会的役割を検討するため、次の4つの研究を探索的に実施した。

研究1では、日本における代表的な妖怪の類型化を試み、「恐怖喚起—非人間型」「注意喚起—非人間型」「人間型」という3つのクラスタを得た。各クラスタの特徴や、属する妖怪の特性を大まかに把握することができ、それらと社会的役割との関連も示唆された。加えて、本研究における分類は従来の一元的な分類ではなく、複数の観点での変数を統計手法に基づき分析したものである。これにより、多元的に妖怪を捉えることができ、さらに、性格や引き起こす感情などの変数を加えたことで心理学的要素を含む新しい分類の提示を可能にした。

研究2では、研究1の妖怪の類型化をもとに、以前妖怪が果たしていた機能を現代においては何が代わりに担っているのかを検討した。結果「聖なる型」「俗なる有害型」「俗なる無害型」の3クラスタを得たが、分布には偏りが見られた。量、質ともに多数の代替物が見られた「俗なる有害型」に対し、「俗なる無害型」には、ポジティブな機能しか持ち合わせていない2つの代替物しか見られなかった。しかし、妖怪の根底にあるのはネガティブな機能であり、両方の機能を持ち合わせているケースはあれど、ポジティブなだけでは妖怪たりえないと考えられる。それゆえ「俗なる無害型」の代替物はその機能を果たしきれていないといえるであろう。上記の結果からは、現代においては、人間の恐怖を喚起し行動抑止につながるものは多数存在するが、注意を喚起し行動の規範となるようなものが少ないことが示唆された。

研究3では、AIとこっぴを用い、科学的／非科学的対象物への印象評価の差異の検討を試みた。結果は、

1) 本論における社会的役割は「社会や人間に対する妖怪の作用」とし、社会心理学で用いる「役割」とは区別して用いることとする。しかし今後、より明確な定義づけをし、表現についても最検討する予定である。

AIとくっばでは印象評価の因子構造自体が異なることを示した。項目ごとの分散分析においては40項目中38項目で条件の効果が有意であった。くっば条件が高得点であった項目は好意的な印象と不可思議な印象に大別できた。これらはAI条件だけでなく、統制群である友だち条件と比較しても有意に高い得点であった。不可思議だけでなく、好意的な印象についてもくっばが高得点であったことから、非科学的対象物がそれらの機能を果たしている可能性が示唆された。

研究4では、他者による承認が非科学的対象物遭遇時の感情喚起に与える効果を検討した。科学的な帰属が困難な出来事に遭遇した時、他者から承認を得られた場合は安心感情が高まり、得られなかった場合は不快感

情が高まることがわかった。さらに、不思議現象に対して懐疑的な考えを持つ場合は、他者から承認が得られたことにより緊張感情が高まる可能性が示された。

研究1から4の結果から明らかになったことを、生起メカニズム仮説における個人内の原因帰属、社会的共有と他者からの承認、社会的役割という3つのポイントで整理すると、個人内の原因帰属については、研究3の結果から、科学的対象物と非科学的対象物の背景には異なる構成概念があり、非科学的対象物に対して、不可思議だけでなく、陽気、親しみやすい、などの好意的な印象を与えることが示された。これらは個人内の原因帰属過程において、ネガティブな出来事を帰属する対象を選定する要因として、親しみやすさなど好意的なものが含まれる可能性を示している。今後、帰属対象と喚起される感情の種類との関連などを検討することで、個人内の心的過程をさらに詳しく探ることができるだろう。社会的共有と他者からの承認については、研究4の結果から、非科学的対象物に遭遇したとき、他者からの承認を得られた場合は安心感情が高まることが示唆された。個人内の原因帰属とそれに伴う情動を社会的共有し、それに対する他者の承認が得られることにより安心感情が高まり、ネガティブな出来事が緩和されることは、妖怪が生起する要因として、生起メカニズムモデル内での重要な部分を担っていると言えよう。これらの結果からは、妖怪が個人内の結果ではなく、他者との関係性の中で生起してきたことが見てとれる。社会的役割については、研究1と2の結果から妖怪の特性との関連が見られた。このことから、集団内で妖怪が伝播する過程で、その特徴が伝えられると同時に社会的役割が選択されてきたと考えられる。また、同じく集団内へ伝播し、その過程が類似するものとして、うわさが挙げられる。うわさが伝播する要因としては、あいまいさや不安特性が挙げられていることから、恐怖や不安の度合いの高い妖怪ほど伝播の速度が上がることなどが推測できるため、今後検討が必要であろう。

これらの結果は生起メカニズム仮説の一部を支持するものであるが、全体を総括するには要素が不足している。加えて、生起メカニズム仮説自体にも不足している部分があることは否めない。ただ、本論においては、まず概説的に妖怪の生起する心的過程を捉えるという目的もあり、大きな枠組みで生起メカニズムを捉えることとした。今後は、認知的な過程を含んだ仮説の構築に加え、本論では除外した娯楽を目的とした創作物としての妖怪についても言及する必要があると考えている。以上のように多くの課題は残っているが、社会心理学の観点での妖怪研究は、従来の人文的妖怪研究では網羅しきれなかった部分を担うと同時に、多くの妖怪研究者の問いである「妖怪と心の関連」に明確な実証性を持って何らかの知見を提示することができ、かつ、現代社会心理学における新たな可能性を探るという点で、意義があると言えるのではないだろうか。